

<特集:東アジア現代文学と「周縁」の言語>

## 幸福な蝙蝠

温又柔

けれども私は自身にとっても余所者で、しかも見知らぬ国においても余所者なので、戻るべき神秘的な場所などもちえない。なにしろ彼らの土地ばかりでなく、自分の国でも私は「異国の」人間なのだから。時には自国の人々が完全に他人のように見えることもある。だが、実際には彼らの国が私の国なのだ。(トリン・T・ミンハ)

### \*わたしの「国」

私は 1980 年に台湾・台北で生まれた。父方母方の祖父母とも、日本統治期の台湾を経験している。

母方の祖父の母親——私には曾祖母——は客家人だが、それ以外の親戚はほぼ皆、福建省南部にルーツをもつ「閩南人」だ。

父の末の弟、叔父の配偶者である叔母の父親は元国民党の軍人で、いわゆる「外省人」だが、台湾生まれの叔母は、彼女の夫である叔父をはじめ、私の両親、他の伯父や伯母たちと同じような中国語を話す。

結婚当初の叔母は、台湾語(閩南語)と日本語しか話せない姑、つまり私の祖母と話が通じないときもあったというが、数年もしないうちに簡単な台湾語が話せるようになった。私の従妹たちは、台湾語が母語の祖母と接する時間が長いこともあり、「外省人」である自分たちの母親が「お嫁に来る」まではできなかった台湾語を、小さな頃からペラペラと話している。彼女たちの父親——私の叔父——がそうであったように。

叔父夫婦とちがい、私の両親の場合、両方とも「本省人」なので、我が家でははじめから中国語と台湾語がまじりあいながら飛び交っていた。父と母は、時と場合に応じて、二つの異なる言語を使い分ける。赤ん坊時代、つまり、言葉を言葉として認識する以前の私は、父と母が発声する言葉を、中国語か台湾語かと区別することなく、たっぷりと聞いていた。

台湾人としては、ごくありふれた言語環境だと思う。何しろ、数でいえば閩南系の「本省人」は台湾でもっとも人口が多い。私の言語環境が、いわゆるふつうの台湾人と異なるのは、育った場所が出生地である台北ではなく、また台湾(中華民国)にあるどの市町村でもなく、「外国」の日本だったという点だろう。

私は、日本の東京で育った。

そんな私は、日本でも台湾でも、初対面のひとからは「日本人」と判断されることのほうが圧倒的に多い。

これは昨年(2013年)の春の出来事。

台北の某ホテルのフロントで、請問、我想問您們一下……と言いかけるとたちまち遮られた。

——She speaks Japanese!

きっと喜んでもらえるはず、という口調でめのまへの男性が私を見ている。男性が示す方には、やはり微笑をたたえた女性が私を待ち構えていた。胸元のバッジに「田辺」とある。タナベさんだ、と私は思うが、台湾人の同僚たちからは、Tian2 bian1と呼ばれているのだろう。

——明日の朝7時半に松山空港に到着したいのですが……

我想早上7點到機場去、と言おうと思っていた。さすがの私でもこの程度なら難なく口から出る。しかし、日本語が通じるなら、そのほうが私にはずっとありがたいのだ。田辺さんはにっこりとうなずき、

——ここからですとタクシーで30分もあれば十分なので、7時にご出発なさればよいと思います。タクシーを呼んでおきましょうか？ 承知いたしました。では、部屋番号をお願いいたします…… ときばきと対応してくれる。もともと中国語でするつもりだったやりとりなので、思いがけず楽をさせてもらった気分。ありがたい。

田辺さんは毎日のように、中国語ができない日本人——中には台湾を初めて訪れたというひと多いはずだ——と接しているのだろう。そして、今の私がそうであるように、彼らを日々安堵させているのだ。

——そう仰っていただけるなら、わたしもとても嬉しいです。でもお客様は、中国語もおじょうずでしたね。

私の笑みを田辺さんは謙遜と受け止めてくれたようだが、ちがうんです。これは苦笑です。

……確かに、私の中国語は、それを全く知らない一般的な日本人と比べれば、なかなかじょうずなほうだと自分でも思う。私を日本人と思うから田辺さんは褒めてくれたのだ。言葉だけではない。私の表情やあらゆるしぐさ、相槌の打ち方や、ぼんやりとしているときの様子……それらのことごとくは、いわゆる「ふつう」の日本人と見分けがつかない。

## \*わたしの「名前」

母によれば私がはじめて口にした日本語は、まんまでもおっぱいでもない。にさいだった。指を二本立てて、「2歳」と言う私を、周囲の日本人はほほ笑ましく見つめたという。母によれば、2歳児連れの台湾人夫婦を、彼らは温かく受け入れてくれた(だから、私たち一家はそういう意味では幸運だったのだ)。

あれから30年が過ぎる。

私は33歳の誕生日を迎えたばかりだった。その夜、部屋に戻ったあと、田辺さんから姓名を訊かれなかったことに気づく。今頃、私の告げた部屋番号と、当該室と今夜の宿泊客のデータを照らし合わせながら、田辺さんは困惑していないだろうか。

——あれ、さっきのひと、部屋番号をまちがえていたのかしら？ 姓名、温又柔。国籍、中华民国(台湾)。私の姓名は、私が「日本人」ではないことを予感させる。私の国籍は、私が「台湾人」であることを裏付ける。

台湾人といっても、私は3歳目前から日本で生活してきたのだ。

7歳になる年の春から、「ふつう」の日本人たちと同じように、「国語」の時間は、ひらがなの読み書きを練習していた。台湾で育てていたら、ㄅ・ㄆ・ㄇ・ㄉ……と覚えていたはずの時期に、ア、イ、ウ、エ、オ、と唱えていた。

「国語」というコバには、「その国において公的なものとされている言語」という意味がある。「国語」とは、言ってみれば国民に与えられるコバなのだ。だから日本では「国語、コクゴ」といえば、日本語のことになる。事実、広辞苑を引くと、「国語、コクゴ」は、日本語の別称、というふうにも説明されている。

この「国語」という言い方は、中国語にもある。中国本土で採用されている簡体字では「国語」と書くが、台湾で使われている繁体字だと「國語」となる。文字の上では日本語とそっくりな

「国語／國語」は、guo2yu3 と発音され、やはり、自国の言語、という意味になる。同様の意味を持つ「国語・コクゴ／guo2yu3」というコトバだが、それぞれが具体的に示す言語は異なる。前者は日本語で、後者は中国語。

——好！我們從現在開始講國語！（さあ、今から中国語を話そうか！）

日本語ばかり話す娘たちにむかって、思い立ったように父が呼びかける。ヤダヨウ、と反応する私を真似て、小さい妹も、ヤダヨウ、と声を合わせる。私の記憶にある限り、重なり合う娘たちの日本語を聞きながら父も母も可笑しそうだった。子どもの頃の私は、台湾人の両親が、中国語という意味でつかう guo2yu3 というコトバが、「國語」と書くとは想像もしなかった。

台湾、すなわち中華民国という「国家」が公用語とする言語は「中国語」である。

私の両親やおじやおばたちは、「國語、guo2yu3」として中国語を学び、習得した。

もっと言えば、彼らは台湾人として「國語、guo2yu3」を学んだ、ほぼ最初の世代にあたる。

以下は、復習がてら念のため。

……一九四九年、毛沢東率いる共産党との内戦に敗れると、蒋介石の国民党政府は台湾に撤退する。中華人民共和国の成立とともに、台湾は中華民国という「国名」を冠するようになった。以来、国民党政権は、自分たち中華民国こそが中国を代表する唯一の正統な政府だと主張するようになる（中華人民共和国の存在を意識したうえの主張であることは言うまでもない）。「中国」を代表する「国」なのだから公用語は、当然「中国」語でなければならない……大陸では「民国期」と呼ばれた時代、北京官話を基に公用語として定められた「中国語」は、「中華民国」の国名を冠することとなった台湾の「國語」となったのだ。1950年代の台湾に生まれた私の両親（や伯父や叔母ら）は、中華民国の「国民」として、自国の「国語」を学んだ。あるいは、学ばされたといったほうがいい？ 時の政府が「国語推進強化実施計画」を制定し、学校や官公庁等、公共の場における国語使用を義務付け、それ以外の言語を用いることを禁じたのは、1960年代後半。私の両親は中高生だった。

母が、何かの話の流れでこう言っていたことを覚えている。

——中国語じゃないと、先生がぶつ。

母たちが小学生の頃、台湾では、「國語」以外の言語を口にすると、教師から鞭でお尻を思い切り叩かれる。「国語を話す努力を怠りました」という札を持たされ、立たされる。

——我們從現在開始講國語！

(今から中国語を話そう！)

中国語による自分のその呼びかけを、ヤダヨウ、と日本語で拒む娘たちに対して、父はどう思ったのだろうか。中国語を話そうと切り出す時の父は、いつも冗談めかした口調だった。わざとおどけながら、あわよくば喋ってくれたら……とでもいうような。考えてみれば、私も妹も、母からはもちろん、父からも、中国語を話すように強いられたことが一切ない。

……中国語を「母国語」として習得するように強いられた台湾人の「歴史」を少しずつ知るうちに、両親が自分たちの「母国語」を、日本育ちの子どもたちに無理強いしなかったことが奇妙に思い出される。父や母は、そうしないことへの、何か特別な思いがあったのかもしれない……いや、それはやっぱり考えすぎなのか？

何しろ私は、両親から、自分たちは強いられてそれを学んだ、だからあれは我々の言語ではない、と聞かされたことが一切ない。はっきりしているのは、

——なんといってもここは日本。だから、まずは日本語を。中国語は、本人が自分でやりたくなってからでいいだろう。

私が7歳になる年の春、父がそのような決断をくださったことだ。

——國語,她自己想要學習才開始就好了!

(中国語は、本人が好きなときに始めればいい。)

こうして私は、中華学校やインターナショナルスクールではなく、「ふつう」の小学校に入学した。当然、教師やクラスメート、自分以外は皆、日本人という環境だ(当時は、外国人児童が現在からは信じられないほど少なかった)。学校生活の日々が過ぎるにつれ、教師や友だちが日本人であることはすぐに忘れた。自分以外の誰もかれもがそうだったのだから！

このような環境で私は、日本語を「国語」として習得したのだ。

## \* 蝙蝠の憂鬱

「国民」が、その国の国籍を保有する者と定義されるのであれば、私は日本の国民ではない。かつて今も、私は「台湾」(厳密には「中華民国」)の国民だ。しかし私の「国語」は、guo2yu3、ではなく、コクゴ。日本語だった。

「国語」こと日本語は、私と日本の関係をこの上ないほど強く結びつけた。中華民国の「国籍」を持つ限り、限りなく日本人に近い私も台湾の「国民」として保証してもらえる。

「国語」と「国籍」。

日本(語)と台湾(中華民国)。

ときおり、こう思う。

自分は、二つの「国」の間にいる。どちらの「国」に対しても、それを「母国」とも「外国」とも言い切れないのは、私が二つの国の間で育ったからだ。

日本(語)と台湾(中華民国)。

日本で自分の姓名を名乗ったあと「国籍は何ですか？」と訊かれるたび、その質問をした相手と同じような日本語を話していても、自分は彼や彼女と同じ日本人ではないのだなど実感する。しかしそのことはただちに、自分は台湾人であるのだという実感とは結びつかない。そう、○×ゲームのような割り切り方で、日本人でないなら台湾人、日本人でないから台湾人、というふうに私は自分自身のことを捉えるにはどこか抵抗があるのだ。

ときと場合に応じて、日本人のようにも台湾人のようにも自分を感じる。日本と台湾のどちらに対しても別の親しみをおぼえる。と同時に、30年途切れることなく住み続ける国に「外国人」として住民登録している事実を思い知ったり、「日本訛り」の中国語を「外国人みたいだ」とからかわれたりすると、私のような立場は、イソップ寓話の「卑劣な蝙蝠」のように、結局、どちらの「国民」の、真の仲間ではないのかと不安に駆られることもあった。

私には、二つの「国」がある／私には、一つの「国」もない。

白状すれば、私はどちらの国に対しても、疎外感と親近感という真逆の感情を、ほとんど同時に抱くことができる。

他人が私をどのように定義しようと、私自身は考えるよりも早く、そう感じてしまうのだ。

## \* 二十歳の頃

——國語,她自己想要學習才開始就好了!

(中国語は、本人が好きなきに始めればいい。)

父のこの決断のおかげで、私は公立の小中高を順調に卒業し、法政大学にすすんだ。私が在籍した国際文化学部では、2年次の秋学期に諸外国への留学が全学生に課せられている。第二外国語に中国語を選択した場合、行き先は上海外国語大学と定められていた。というわけで日本の学校に通うようになって13年目。20歳を迎えた年の秋、私は語学研修生として上海に行くことになった。4か月半という留学にしてはやや短い期間だが、旅立ちを待つ日々は心が躍った。予想以上に心乱れる日々が始まるとはまるきり思いもしなかった。

上海に到着して、まだ一週間も経っていなかった。

——吃饭了吗？

(めしは喰ったか？)

宿舎の入り口で、警備員の男性に声を掛けられた。この挨拶は、「ちゃんとおなかいっぱいになった？」と互いをいたわる気持ちの名残である。長いあいだ、中国の庶民にとってご飯にありつけるかどうかは最大の関心事だった。台湾語でも、チャ・パア・ボ？ とほぼ同一の表現があるので、私は子どものときから大人たちがそうやって声を掛けあうのをしょっちゅう聞いていたはずだけど、吃饭了吗？ と最初に訊かれたときは、

——我还没吃。所以现在我要去买午饭。

(まだ食べていません。それで、今私は、昼ごはんを買いに行きます)

律儀に答えてしまい、相手を戸惑わせてしまった。しかしその日の私は、日本人同士が、いいお天気ですね、ええほんとに、とやりあうような自然さで、「吃饭了吗？」に、ええ、と軽く笑ってうなずき返した。途端に相手の顔にも人懐こそうな笑みがひろがる。

——最近学习怎么样？

(最近、勉強の調子はどうなんだい？)

留学生寮なので、私が外国人学生であることを前提に彼は言う。私は、还好！と応じる。日本語なら、まあまあってとこだよ、というところだ。私の反応に、そりゃよかったね、と相手の中国語がより滑らかになる。ところできみを見るのははじめてだ、と彼は言う。私が、自分は先週東京から来た留学生である、と自己紹介すると、それにしっちゃあ中国語がずいぶんとじょうずだねえ、と感心してくれた。褒められるととっさに謙遜しなければと感じるのは日本育ちであるからか。私は義務を遂行する心地で打ち明ける。

——说真的,我是台湾人。

(実は私は台湾人なのです)

——台湾？

私の言葉に相手が興味を寄せるようすが伝わる。

——那么, 你是从台湾来的？

(へえ、きみは台湾から来たのかい？)

日本語では言い慣れていたことだが、中国語で話すのはそういえば今が初めてだと思いながら私は、自分は台湾で生まれて日本で育った、と彼に告げる。そこまではすこぶる順調だった。調子が狂いだしたのは、それならきみはいつから日本に住んでいるんだ、と訊かれたときからだ。

——二岁的时候。

2歳のときから、と言うつもりで答えると、相手は笑った。

——“二岁”？ 哈哈, 你应该要说“两岁”！

中国語で「2」を表わすには、「二(er4)」と「两(liang3)」というふたつの言い方がある。単に数をかぞえるときは前者をつかえばいいのだが、「2つの」と人や物の数を数える時は後者を用いなければならない。要するに「二岁」は初歩的な言い間違いなのだ。だから彼の中国語を翻訳すると、こんな感じになる。

——「ふたつ」歳？ ハハ、こういうときは「に」歳と言わなきゃ！

それから、彼はこう続けた。

——台湾人っていうのに、きみは中国語が下手だね。

つい先ほど褒めたばかりなのにいきなり貶す。

——你的普通话讲得真不好！

(きみの中国語は、ほんとにひどいね！)

……今の私が同じことを言われたら、そんなこととっくにわかってたでしょ、とか、あなただって日本語はまったく話せないじゃないの、と笑って流せる。

しかし、二十歳だったこのときはものの見事に心が挫けた。

中国語が下手。

ほんものの中国人から面と向かってそう言われるのは、このときが初めてだった。それも、「日本から来たばかりにしては、きみの中国語はじょうずじゃないか」と褒められて喜んだ直後



だったのだ。おそらく、ただ単に、言葉の下手さを指摘されただけなら、あそこまで動揺しなかったと思う。日本人ではなく台湾人であると知られた途端、自分が話す中国語への評価は 180 度変わる。そのことに、私は少なからぬショックを受けたのだ。

そして私は、上海にいた四か月間、ほうぼうで同じことを言われ続けたのだ。

さすがに私自身、認めざるを得なかった。

台湾人にしては自分の中国語はとんでもなく「へた」。けれども、ゼロの状態から中国語を学びだしたばかりの日本人と比べたら、比較的「じょうず」なほうではある(もともと、努力家の同級生たちや、語学的な勘が優れている友だちの中国語が私よりも「じょうず」になるのは時間の問題だったのだが)。

更に言えば、上海での日々を重ねるうちに私は、自分の話す中国語が奇妙な響きを持っていると感じないではいられなくなっていた。留学に備えて、日本で中国語の授業を受けていた頃から私は、記憶に頼って再現させるときの自分の中国語が、学校で新たに教わることになった中国語とはやや異なるものだと気づいてはいた。

とりわけ、巻舌音を口にするとき、その差は顕著となった。

「好吃(美味しい)」は、「ハオツー」ではなく「ハオチー」。「我是(私は)」は、「ウォースー」ではなく「ウォーシー」。

何も考えずに話すと、確実に「南方訛り」と指摘される。だから私は、教室や教師の前では、なるべく舌を巻き、「標準的」な発音をしようと心がけていた。

大学に入り、中国語を「外国語」として本格的に学びはじめるまで、自分にとって第二の言語である日本語を、日本人に交じて「国語」として習得したことで引き換えに、日本語を話すよりも早く口にしてはいたはずの中国語(と台湾語)を、きれいさっぱり忘れてしまったのだと思っていた。私の中国語の端々には、発音をはじめ選択する単語・熟語のレベルに至るまで、私の「台湾時代」の痕跡が残る……大学で与えられた教科書に従い、教わったとおりに読むときは、巻舌音に気を付ければよかった。問題は、ちょっとした雑談のときだ。私はよく、教科書には載っていない、どちらかといえば、記憶の中にある表現を口にしてしまうことがあった。とても大きい、というつもりで、好大(hao3 da2)と言ったときのこと。教師は一瞬、わからない、という表情を浮かべ、ややあっとして、訂正するのだ。

——好大？ それは、台湾の、それも若い女性がよく言う言い方ですね。ふつうは、很大 (hen3 da2)と言いますよ。

このようなことが続き、次第に私は悟っていく。自分が自然に口にしてしまう中国語は、台湾ではなく大陸の「中国語」を教える大学教師からすると、ことごとく「標準」から外れている。特に、クラスメートが注目する中、それを指摘されるのは、恥ずかしかった。萎縮させられつつも、熱心な教師たちをうらみはしなかった。大学に限らず、語学の教師は「正式」な外国語を教えるのが職業的義務なのだから。

ただし、のちに、少し中国語を齧ったという日本人から、自分の中国語を「南方訛り」を「日本語でズーズー弁みたいなものだよね」と揶揄されたときは、相手に対して殺意に近いものを抱いた。そのひとは、以前、こんな発言をしたこともあった。

——せっかくなら、きれいな中国語を身に着けたいから、留学先も北京以外考えられなかったんです。

考えてもみてほしい。日本語を理解する外国人が、たとえば東京以外の土地出身の人たちがごく自然に話す日本語を、「訛っていて正しくない」とあざ笑う姿を。そして、このように話すのを。

——ぼくは、きれいな日本語を勉強したいから、東京にしか行きません。

……これほどあからさまではないが、決して悪気からではなく、むしろ当人は善意のつもりで、

——ねえ、その巻舌音、直しなさいよ。そうすれば、あなたの発音は完璧になるわ。せっかくおじょうずなんだから、そうしないなんてもったいないわよ！

と言ってくるひともいた。

このようなひとたちと出くわすたび、

——きれいな中国語って何？ 正しい発音って何？ 完璧で美しい言葉を判断するのはだれ？

腹の中でふつつつと疑問が渦巻いた。

私は、私自身の中国語を「おかしい」と笑うならともかく、台湾人の中国語ぜんたいをそのように断定する日本人と出会うと、強烈な違和感を抱かずにいられない。

言うまでもなく、大陸の中国語だけが正しい中国語なのではない。台湾の中国語もまた、まったく正しい中国語である。そういう意味では、私は台湾生まれの台湾人なのだから、堂々と台湾の中国語を話せばいい。

ところが、上海にいた時期の私は、そうやって胸を張ることもできなかったのだ。

——台湾人？ それなのに、日本人みたいな中国語を話すんだね。

上海滞在中、初対面の日本人にいきなりそう言われたことがある。

実は、随所で台湾を感じさせる私の中国語は、そうかといって、ほんものの台湾人が話す中国語とも違っていったのだ。上海在住のその彼はこう続けるのだ。

——台湾人というから、日本育ちとはいえ、もっとじょうずなのかと思ったのに。

私はすぐに気が付いた。このひとは、この私と友達になりたいのではない。台湾人の女の子と知り合いたかったのだ。案の定彼は、自分は以前高雄にいた。台湾に駐在していたときのほうが今よりもずっとよかった。大陸よりも台湾のほうがずっと好きだ、と話し始める。台湾を褒めながら大陸を貶すことで、私との距離を縮めようとする気配は伝わったが、彼の話は微塵も私を楽しませなかった。当然のように私は、彼が思い描いていたような台湾人でも女の子でもなかった。絶望的に退屈な夜を過ごさなくてはならなかったのは些細な不幸ではあったが、魅力のない人間の記憶は放っておいてもあっさり薄れるので大した問題はない。ただ、彼の放った第一声だけが、いつまでも私の内に燻り続けた。

——日本人みたいな中国語を話すんだね。

ただの「南方訛り」ではない。私の中国語は、日本人が話すようにも聞こえるのだ。中国人とも台湾人ともそして日本人とも、少しずつずれている。こんなワケのわからない中国語を話す自分はいったい何者なんだ？ 20歳の私は真剣に悩む。

——こんなわたしっていったいナニジンなんだ？

日本にいたときも、同じ問いを抱いたことがなかったわけではない。けれども、こんなふうに、言語の側面から混乱させられることは一度もなかった。考えてみれば、私が話す日本語を聞いて、誰も私を日本人でないとは思わない。私の日本語がおかしいとからかう日本人もいない。誰の耳にも私の日本語はとても日本人らしい。

上海で、知ったのだ。

自分と、中国語の関係はきわめて奇妙である。

ほんものの中国語が響く環境に身をおきながら、日本育ちの台湾人が、外国語としての中国語を学習するために、中国大陸にいる。その奇妙さ(と当時は思わずにいらなかった)を、日々、感じていた。

——國語,她自己想要學習才開始就好了!

(中国語は、本人が好きなときに始めればいい。)

その時が訪れ、好きで上海にいるはずだった。それなのに私は、中国語から逃げるようになった。そして、語学留学生としては絶対にとってはならない行動——日本語に逃げ込んだのだ。

日本から持ってきた本を繰り返し読み、それでは飽き足らず、南京街の外文書店にしょっちゅう出向き、日本で買うよりも高くつく日本語書籍を次々と買い込んだ。

読むだけではなく、私は日本語を書きもした。

日記は中学生の時からつけていたが、上海で過ごすようになって、一気に書く分量が増えた。宿舍の自室で、日記帳を開くとき、私の胸は高鳴った。

さあ、存分に日本語を書くぞ。

書くことはおろか、話すこともままならない中国語と比べて、日本語は決して私を不安にさせない。つまり私は、上海で中国語との関係が不安定になればなるほど、自分と日本語の関係は強固であると(今思えば)錯覚した。そして、ほとんど酔い痴れていたのだ。日本語を書くときの、万能感に。一種の、中毒症状だったのかもしれない。なぜなら、その高揚感にはいつも、淡い後ろめたさが付き纏っていた。日本語を書き散らす自分にもう一人の自分が囁くのだ……せっかく上海にいるのに、中国語から目を逸らして日本語に閉じこもっているなんて、本当にそれでいいの?……自分は中国語から逃げている。楽なほうに流されている。明日からは日本語を自分に禁じよう。中国語潰けになろう。そう思って自分を奮い立たせたりもした。

しかし翌日もまた、宿題と最低限の予習復習を済ませると、同じことを繰り返す。

……上海にいた20歳のときのことを思い出そうとすると、日本語と自在に戯れているときの高揚感と、中国語から逃げているという罪悪感が同等の強度で蘇る。

今なら、私はあの時期の自分をこのように言語化できる。

台湾の〈国籍〉を持つ身の上でありながら、中国という〈国家〉に身をおく自分自身の状況を、〈国語〉として習得した日本語で、私は嘆き続けていたのだ。

〈国籍／台湾〉〈国語／日本〉に加え、〈国家／中国〉という三つの〈国〉の狭間で揺れ惑う上海での日々は、私が、自分自身の“アイデンティティ”について漠然と問いはじめた最も初期的な段階だったのだと今になって思う。

## \* 幸福な蝙蝠

上海から帰ってきて、13年が過ぎた。20歳だった私は33歳になった。

——ひとは日本人に生まれるのではない。日本人になるのだ。

と、うそぶいてみたくなる。

姓名と国籍を名のらない限り、だれも私を日本人でないとは思わない。皮膚や瞳や髪の色が大多数の日本人と同一であるというのもあるが、日本語を話す私は、日本人そっくりだ。それでふたたび、うそぶきたくなる。

——ひとを日本人にするのは、日本の「国籍」ではない。「国語」として習得した日本語だ。

さて。私は、ほんとうに日本人なのか？

法の上では、今も私は日本国の「外国人」に該当する。

2歳半で来日して以来、私は「家族滞在」という資格でこの国に在留していた。「家族滞在」とは、その名の示すように、別の資格を持つ者の被扶養者として日本に留まるための資格である。要するに私は、父の「家族」として、この国に留まることが許されているという身分だった。在留資格が「家族滞在」の外国人は、原則として働くことはできない。当時の私は、法の上では、そのような立場に該当した。「家族滞在」に限らず、就労制限のある資格の所持者がアルバイトやパートタイムで働きたい際は、「資格外活動許可」を申請する必要がある。しかし、許可されても、週28時間内の範囲でしか働くことはできない……幸い、「資格外活動許可」を得るのは比較的容易だったが、新たにアルバイトを始めるたびに、理不尽さを感じずにはいられなかった。ただ「国籍」がないという理由で、3歳目前からずっと暮らし続けている国で、ごくふつうの生活を営むために、こんなふうにいちいち奔走しなければならないとはなんと厄介なのか。

その思いは、大学院を修了したあと、いっそう募った。20代も半ばに差し掛かった私は、日本語教師を目指しながら、都内各地の小学校や中学校に赴き、大陸や台湾から来日したばかりの児童や生徒に日本語を教えるアルバイトをはじめた。かつての自分のような、親や、親代わり

の存在の何らかの都合で来日した子どもたちに、日本語を、中国語で教える。子どもたちの中には、父親が日本人であるから、とか、一家で帰化したから、と理由は様々だったが、日本語を教える側の私が持っていない「日本国籍」を持つ子どももいた。

日本国籍を所持しつつ日本語ではない言語を母語に持つ子どもたちに、かつて「国語」として習得した日本語を教えている日本国籍を持たない私。

台湾国籍所持者の私による日本人のような中国語をとおして、日本国籍を持ちながらも日本語には初めて触れる子どもたちが、あ、い、う、え、お……と日本の文字を覚えていく。

彼らの国は、私の国。私たちの国は彼の国。

かつての自分のような彼や彼女と向き合う日々の中で、私は自分と日本及び日本語の関係を日々問い直していた。

在日外国人向けの無料生活情報誌で、某行政書士事務所の広告を見つけたのは、まさにそういう日々の最中だった。

「帰化・永住許可申請等、お手伝いします」

……いっそ、帰化する？ しかし、経験上、私には鮮やかな確信があった。

たとえば、日本国籍を持ったところで、私が、自分自身をふつ々の日本人と覚えることは永遠にないだろう。(こちらの可能性のほうがずっと低い)今後、台湾の中国語を完璧に習得しても、自分をふつ々の台湾人と覚えることはないように。それなら、生まれた国の「国籍」を保ちながら、育った国の「永住権」を確保するほうが、自分にはふさわしい。行政書士の推奨もあり、私は日本国における在留許可の資格を「家族滞在」から「定住者」に切り替え、一度の更新を経て、「永住権」を申請し、昨年(2013年)の秋、ついに許可がおりた。

台湾の〈国籍〉を持つ身の上で中国という〈国家〉に身をおく自分自身の状況を〈国語〉として習得した日本語で嘆いた日々から13年。

——國語,她自己想要學習才開始就好了!

(中国語は、本人が好きなときに始めればいい。)

と、父が決断したときから26年。

台湾人の両親とともに日本に初上陸したときからは、30年が経っていた。

私には、一つの「国」もない。／私には、二つの「国」がある。

「国籍」と「国語」。

両親とは異なる言語を「国語」として習得した私の「国籍」は、今も彼らと同じ、「中華民国／台湾」だ。

こんな日本人／台湾人が、ここにいる。そのことをもう嘆きはしない。いや、むしろ誇らしい。

日本育ちの台湾人として生きてきた時間が、私にそう実感させる。今や私は、幸福な蝙蝠そのものなのだ。

(了)

(On Yuju 温又柔)